

態度育成教育の危機

- UAE教育ミッションに参加して -

和田孫博

今年一月に経済産業省のアフリカ中東局からUAE(アラブ首長国連邦)のアブダビへの教育ミッションに参加して欲しいという突然のアプローチがあった。アブダビは石油以外の分野、特に教育と医療において日本との連携を望んでいて、将来的には子弟を日本の高校や大学に留学させたいという意向なのだそうだ。本校はこれまでどこの国からも留学生を受け入れた経験はないのだが、現地の日本人学校で日本の教育を受けたUAE人を将来受け入れるという話であり、実際に受け入れるかどうかはずっと先に検討してくれればいいということなので、参加することにした。参加校は他に、多摩大学、慶応大学、立命館アジア太平洋大学、甲南大学、いずれも附属中高を持つ大学であり、中高のみは本校だけであった。出発前のブリーフィングによると、いずれも宗教色のない私学で、地域も関東、関西、九州とバランスを取ったということだが、どう見てもあまり慎重に選んだとは思えない、急仕立ての使節団だった。

出発は三月下旬。現地一泊、二機中泊という強行スケジュールに苦笑いしながらも、国費で海外出張という初めての経験に多少は緊張感を持って臨んだ。実態は現地の高校や大学の視察、教育官僚との懇談などが主で、留学生受け入れに関しては、今後人的な交流を進めるよう両国が協議していくということを確認しただけであったが、最後にアブダビ日本人学校を訪問したとき、その校長先生や教職員の話から日本の教育の特殊性を感じ取れたのが、私にとっては一番の収穫であった。

二、三年前、アブダビの皇太子から、UAE人に日本の教育を受けさせたいという話があったのを受けて、現地大使館はアブダビ日本人学校にUAE人の子弟を受け入れることを決断した。ご存じだとは思いますが、世界各地に設置されている日本人学校は、その地に生活する日本人の子弟に日本の教育を受けさせるためにあり、文科省の所管である。教員も教科書も日本から供給される。教育課程もアラビア語の授業が別にある以外は日本の指導要領に従っている。そこにUAE人を受け入れるということ自体大変なことである。小学校一年に日本語を全く知らない状態が入ってこれても困るので、まず三年保育の幼稚園課程を日系石油会社を中心にNPOとして設置し、毎年二人ずつ現地人を受け入れ、幼児期から日本人と混ぜて、日本語で教育を受けさせることにしたのだそうだ。三月の時点で年中、年少にそれぞれ二人ずついた。駐UAE大使自身がその陣頭指揮に立っているということだ。

なぜアブダビの人がそこまで親日的なのかはさておいて、子弟を通わせている保護者からは、とても評判がいいということであった。中でも、しつけや団体行動をしっかり身につけさせる点が高く評価されている。UAEという国はとても豊かな国で、あらゆる労働は人口の80%を占める外国人労働者にさせ、現地人は統治や経営のみを行っている。子どもは生まれたときから召使いに世話され、外出するときはお抱

え運転手が車で送るという生活だ。しかし日本人学校は、現地人の子弟にも必ずスクールバスを利用することを求めている。日本人の生徒に倣って迎えに来たバスの運転手に挨拶をする。園に着くと下駄箱に靴をそろえて入れる。先生や友だちへの挨拶、おもちゃの片付け、二、三ヶ月もするとそういう基本動作が自然に身につく、自宅でも靴をそろえて脱ぎ、親や召使いに挨拶をするようになったというのである。また、日本人学校ではPTAを組織し、保護者の親睦を図る行事が多い(日本人会的な色彩を負っているのだと思う)のだが、現地人の保護者にも参加を義務づけ、おにぎりや寿司と一緒に作ったりする。こういうことは、現地の学校はもちろんのこと、英・米・仏が設置しているインターナショナルスクールでも全く行われていないので、はじめは戸惑いを持たれたが、すぐに積極的に参加してくれるようになったそうだ。基本的なしつけと家庭ぐるみの集団意識の育成という日本の学校では当たり前のような光景が、世界的にはユニークであり、少なくともUAEでは評判がいいということを知ったのである。

元文科官僚の岡本薫氏は『日本を滅ぼす教育論議』(講談社現代新書)の中で、外国の専門家の一部が「日本の学校教育の特徴」として注目してきたのは「アティテュード・デベロップメント」(態度育成)であると述べている。その態度として挙げられているのは「協調性」、「勤勉性」、「進取の気性」であり、掃除当番、給食当番、班別行動や学芸祭・運動会・林間学舎などの特別活動が「協調性」の育成に大きな役割を果たしているというのである。日本ではごく当たり前の掃除当番も、宗教的な理由で採用しているタイなどや労働者教育の一環で導入している東欧諸国以外ではないということである。岡本氏によれば、この日本教育の特徴は、「政府の教育政策の成果ではなく、むしろ日本文化を背景とした、教師たちの自然な営みや努力の成果である」という分析も行われているとのことだ。

ところが、現在の日本の学校教育を見てみるとどうだろうか。学力の低下が声高に叫ばれ、指導要領の改訂や授業時間の増加、地域・学校間の学力比較などに心を奪われている。昨年度から文科省が行っている全国学力調査でも、学校別の成績を公表する、しないというような議論が喧しいが、実は同時に行っている学習意欲や生活習慣などに関する調査結果はほとんどマスコミに取り上げられない。週五日制になって授業時間を確保するため、学校行事の廃止や縮小を進める学校も多い。放課後も補習が組まれ、クラブ活動が圧迫されている中学校や高校もある。政府の教育政策や変質した保護者による圧力が、「日本文化を背景とした日本教育の特性」を破壊しつつあるのではないかと心配である。と言って、欧米式の教育の特性をうまく取り入れているわけでは決していないのだ。

夏休み後半のある日、日経新聞の教育欄のコラムに、ある国立大学附属高校の記事が載っていた。メリハリをつけた勉強をすれば、学芸祭の練習と入試勉強の両立は可能だという、まあ当たり前のことなのだが、それが記事になる時代なのかという気もする。その記事の最後には、その高校の募集要項に「本校においては、勉学も掃除も等価値であります。以上のことをご理解いただいた上で、本校入学をお考

えください」という一文が載っていることが紹介されていた。国立附属として頑張っているなという印象を受け一方、入試要項にこのようなことを書かなければならない現状に憂いを感じました。